3. 幕末の美濃焼の販売について

享和2年（1802）に尾張藩の蔵元制度が確立されると、翌年には美濃焼物の多くも「尾張藩御国産」として尾張藩蔵元を通して江戸や大坂などの都市を中心に販売されるようになりました。

美濃の生産地では尾張藩が後ろ盾となることで、美濃焼物販売の安定化を期待していましたが、尾張藩から支払われるはずの荷代金がたびたび遅滞し、また多重にかかる手数料のために次第に困窮していきました。そこで、美濃焼物を江戸で直売する水揚会所を設置しようとしましたが、江戸・名古屋の瀬戸物問屋からの反対があり実現することはありませんでした。

その後、天保6年（1835）に尾張藩蔵元への販売窓口である「美濃焼物取締所」が多治見村に開設され、取締役には多治見村の二代西浦圓治が就任しました。取締所では生産・販売の鑑札の交付や抜け荷などを管理するようになりました。これまで窯屋から直接名古屋商人などへ販売されていた美濃の幕府直轄領（多治見村、笠原村、下石村、久尻村・高田郷、高山村等）のやきものの販売は、取締所が一括でおこなうことになりました。窯方での直買いは禁止され、輸送ルートも限定し、取締所へ手数料を支払うなどの取り決めがなされました。

▲幕末に多治見市域で生産されたやきもの

4. 多治見の大陶器商「西浦屋」

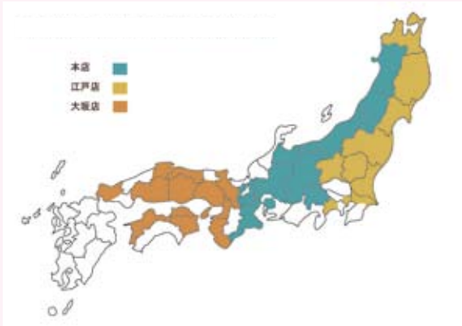
西浦家は多治見村で「西浦屋」という屋号で焼物販売をおこなっていました。西浦家は文政3年（1820）に割木販売を始め、同7年（1824）には徳利を江戸向けに販売、同9年（1826）には新製物（磁器製品）を大坂向けに販売したという記録が残っています。弘化3年（1846）に大坂西横堀町に大坂店を、翌4年（1847）には江戸日本橋堀留1丁目に江戸店を出店し、多治見村の本店とともに中央市場へ参入していきました。

多治見村本郷の本店では主に美濃で生産される徳利、磁器製品を江戸、大坂、甲州、出羽、越後、越中や近国へ販売した他、割木、呉須、皮灰、イス灰などの陶磁器原料や米、味噌、塩、反物などの日用品を窯屋へ販売していました。

江戸店は、従来の得意先であった近江屋喜兵衛が経営不振となり、問屋株を譲り受けて開店したのが始まりです。支配人は妻木村出身の吉兵衛で、安政5年（1858）には12人の奉公人が働いていたことがわかっています。江戸店では美濃焼物、瀬戸焼物、京都・信楽、有田焼、相馬焼などを江戸やその近隣、陸奥方面へ販売していました。

大坂店は、同4年（1857）には名古屋商人に代わって京坂・西国への美濃焼物販売を独占するようになりました。美濃焼物、瀬戸焼物の他、京焼・信楽を畿内、紀州、四国、山陽、山陰へ販売し、九州地方から仕入れたイス灰や呉須などの陶磁器原料を本店へ販売していました。

その後、明治5年（1872）に美濃焼物の生産販売が自由化されると、製造業者や陶器商が増え、多治見はその集散地として活気にあふれていきました。



▲江戸末期　西浦屋本店・江戸店・大坂店の焼物の売り先

主要参考文献

多治見市 1980『多治見市史』通史編上
多治見市教育委員会 1993『多治見の古窯第３号　美濃窯の焼物』
瑞浪陶磁資料館 1996『美濃のやきもの　展示解説』
多治見市教育委員会・文化財保護センター 2017『多治見市有形文化財指定記念企画展「幕末の陶器商 西浦屋」』（企画展パンフレット）
日本陶磁器卸商業協同組合連合会 2020『やきものハンドブック』
小木曽郁夫・岩井美和 2020「西浦家のあゆみと美濃焼物～西浦家文書研究のために～」（『多治見市文化財保護センター研究紀要第14号』）

多治見市文化財保護センター企画展パンフレット
「やきもの入門ー多治見の近世編ー」
展示期間・場所：令和５年１月16日（月）～６月23日（金）
多治見市文化財保護センター展示室
発行　：多治見市教育委員会・文化財保護センター
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘10-6-26
TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033
URL https://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/
発行部数　：600部（印刷費用71,940円）（税込み）

やきもの入門

ー多治見の近世編ー

1 磁器染付丸碗（市之倉中２号窯出土）
2 御深井釉双耳花瓶（仏花瓶）
3 錆釉布袋徳利（部分）

令和2年に開催した「やきもの入門―多治見の古代中世編―」に続く、「やきもの入門」第2弾です。本企画展では近世編として、江戸時代に多治見や周辺地域でつくられたやきものを紹介します。

江戸時代になると、それまでの窖窯や大窯より熱効率と量産性に長けた連房式登り窯が九州から伝わり、織部や御深井などの優れた陶器が生産されます。その後、江戸時代中期には茶道具に加え徳利などの日常雑器が大量に作られ、茶陶を中心に生産していた江戸時代初期までと大きく変化しました。鉄釉の茶碗や徳利、掛け分けをした鎧手茶碗や御深井釉製品が多く作られ、色絵製品も登場します。さらに江戸時代後期には磁器の製法が瀬戸から伝えられ、陶器よりも固く焼締まり、緻密な素地である炻器染付の製品や磁器製品が市之倉などでいち早く作られます。

連房式登り窯によって大量に生産されたこれらのやきものは、陶器商によって日本各地へと輸送されていきます。西浦家は、多治見を代表する陶器商のひとつで、当時多治見村で「西浦屋」という屋号でやきもの販売を行っていました。また西浦屋は大坂と江戸に出店し、多治見村の本店とともに中央市場へも参入しています。こうした美濃焼の販売ルートの確立や、炻器・磁器づくりの技術が、明治時代以降の海外向け製品を生み出す土台となりました。

1. 古代中世編のおさらい

須恵器（すえき）

5世紀の初めに朝鮮半島から技術が伝わった、釉薬がかかっていない薄くて硬い灰色のやきものです。器種には坏や碗、皿などがあり、当初は古墳の副葬品や祭祀具として使用されましたが、奈良時代にかけて次第に日常生活の器として使用されるようになりました。

東海地方では5世紀前半に尾張の猿投（さなげ）窯で生産が開始され、東濃地方では7世紀から始まります。多治見市は猿投窯産須恵器などの消費地でしたが、8世紀には北丘古窯跡群（北丘町）で須恵器を生産するようになりました。地域の需要に最低限対応する程度の小規模生産であったと考えられています。

▲須恵器　碗（北丘35号窯出土）

▲灰釉陶器　長頸瓶（北丘8号窯出土）

灰釉陶器（かいゆう）

植物の灰を原料とした釉薬が初めて施された奈良時代末から平安時代後期のやきものです。器種には碗や皿、鉢、瓶、壺などがあり、平安時代には主に上流階層向けのやきものがつくられましたが、10世紀代になると一般庶民にまで使用が広がりました。

多治見市域では9世紀後半に生産が開始され、北丘8号窯（北丘町）や虎渓山1号窯（虎渓山町）などの窯跡があります。この地域は燃料や原料の土が豊富であること、東山道を通じて消費地である信濃（しなの）（長野県）や上野（こうずけ）（群馬県）などの関東地域に近いことなどから、東日本を中心として日本各地に流通しました。

山茶碗

灰釉陶器の流れを汲んだ釉薬をかけないやきもので、東海地方一円で生産されました。この地域では 11 世紀後半から15 世紀頃まで生産されています。窖（あな）窯と呼ばれる丘陵の傾斜地に築かれた地下式あるいは半地下式の窯で焼かれました。

器種は碗や小皿が中心ですが、少数ながら壺や鉢なども焼かれました。需要が減った灰釉陶器に代わって大量生産され、主に武士や庶民が対象でした。碗は窯の中で 10 枚程度重ねて焼成しており、重ねた部分には籾殻を入れて製品が溶着しない工夫がされています。多治見市内には確認されているものだけで400近い窯跡があります。

▲山茶碗　碗・小皿（明和1号窯出土）

大窯製品

16世紀代に「大窯」とよばれる窯で焼かれたやきもので、灰釉や鉄釉、銅緑釉、瀬戸黒、長石釉（志野）、黄瀬戸などの製品が多くつくられました。大窯は窖窯より焼成室（製品を焼く部屋）が大型化し、切り立った谷の頂上付近に築かれました。焚口を縮めて燃焼室を左右に広げ、炎が立ち上がる壁と小分炎柱を作ることで火力を増すことに成功し、様々な釉薬を施した製品が焼かれました。

器種は16世紀半ばに流行した茶の湯に用いられた茶陶のほか、小皿、すり鉢、徳利などの生活雑器、仏花器や香炉などがあります。

多治見市内の大窯は、白天目茶碗が出土した小名田窯下（おなだかました）6号窯（小名田町）、瀬戸黒茶碗が生産された尼ヶ根（あまがね）窯（小名田町）の他、妙土（みょうど）窯（笠原町）などが挙げられます。

▲天目茶碗（小名田窯下窯出土）

2. 近世のやきもの

江戸時代前期のやきもの

近世（江戸時代）になると、京都や堺の茶人や町衆、諸国の大名から茶陶（ちゃとう）の注文が殺到し、中世までの大窯では量産が追いつかなくなります。こうした状況の中、慶長10年（1605）頃にこれまでの窖窯や大窯より量産性に優れた連房式登り窯が、九州唐津（からつ）（佐賀県）から久尻（くじり）（土岐市）の元屋敷窯（もとやしきがま）に導入されます。その後、周辺の陶工たちに広がっていき、多治見でも小名田窯下3・7号窯などで導入されました。17世紀の初頭には徳川家の茶道師範である古田織部（ふるたおりべ）の指導のもと、斬新で奇抜なデザインの織部焼が作られるようになります。古田織部の死後（1615～）は茶道師範が小堀遠州（こぼりえんしゅう）へと変わったことで、中国陶磁を模した御深井釉（おふけゆう）製品の生産が始まり、江戸時代初期を通して優れたやきものが多く作られました。

▲御深井釉水指

▲青織部沢潟文徳利

江戸時代中期のやきもの

江戸時代中期（17世紀後半～18世紀中葉）になると徳利など生活雑器の生産が中心となり、これまでの茶陶中心の生産から大きく変わりました。中期のやきものの特徴は、鉄釉を使った「飴釉陶器（あめゆう）」「漆黒釉陶器」や、御深井釉製品が多く作られたことです。また、灰釉と鉄釉をかけ分けた「鎧手（よろいで）」の製品も流行し、煎茶碗や徳利などが作られました。この頃に赤や緑などの上絵の具を使った色絵のやきものが美濃で作られていたことも分かっています。

▲鎧手煎茶碗（平野西窯出土）

▲色絵蓮文香炉

江戸時代後期のやきもの

江戸時代後期（18世紀後半～）に入ると、鉄絵で柳の絵が描かれ、灰釉がかけられた「柳茶碗」が盛んに作られるようになります。柳茶碗は、市之倉（水神窯、中2号窯）や滝呂（滝呂日影1号窯）などから出土しています。文化年間（1804～1818）には、本格的な磁器染付の生産を開始した瀬戸からその製法が美濃に伝えられ、市之倉などでいち早く作られます。また、陶器よりも固く焼締まり、緻密な素地をしている炻器（せっき）染付製品も同時期に作られました。炻器染付製品は、当時まだ高価であった磁器製品と比べて安価であったため、江戸などの都市の周辺地域にも広く普及していきました。

▲炻器染付 広東碗（市之倉中2号窯出土）

▲磁器染付 端反碗（市之倉中2号窯出土）

こうした炻器や磁器の製品が誕生する一方、中期以前から作られていた徳利が、その更なる需要の高まりによって、美濃窯の各地で大量に生産されるようになります。中でも高田で採れる良質の陶土である「白粉土（しらこつち）」が徳利に適していたため、高田は徳利の一大産地となっていきます。美濃窯全体では年間6万俵の徳利を出荷していました。炻器・磁器といった、新たに作り出したやきものと共に、徳利などの美濃焼が全国へと売られていきました。